

[特集]

どんと来い， 肺がん診療

それぞれの立場で患者を支えるために

- [Chapter 1] 肺がん up to date
どんと来い，最新の診断と治療
- [Chapter 2] 肺がん治療に伴う全身症状
どんと来い，他科症状・他科疾患
- [Chapter 3] まれな肺がんの topics
どんと来い，希少がん
- [鼎 談] 高度に専門化する肺がん診療に
どんと構えるために
チーム医療，共同意思決定，薬の選び方

肺がんはこの 20 年間で飛躍的な治療の進歩が起こり、生存期間が延長しています。しかし罹患数も増加しており、現在本邦のがん罹患数の 1 位となっています(直腸がんと結腸がんをまとめた場合は大腸がんが 1 位で肺がんが 2 位)。このため、呼吸器内科医にとっては、肺がんは外来および入院におけるリソースを最も割く疾患といっても過言ではないでしょう。しかしながら呼吸器内科医と一纏めに括ってもそのバックグラウンドは多彩であり、喘息、間質性肺炎など肺がん以外を専門とする医師にとっては最新知識をフォローすることは容易ではありません。

また免疫チェックポイント阻害薬、分子標的治療薬などの薬剤の合併症からほかの内科医も診療に参加することが増えてきており、さらには併存疾患をフォローしているクリニックで肺がんや薬剤に伴う合併症の診察をする場面も増えてきています。バックグラウンドや診療の現場が多様な医師がそれぞれの立場で肺がん患者を支えていかななくてはならない時代が到来しており、知識・診療の update を絶え間なく行っていかななくてはなりません。

本特集では、Chapter 1 を「肺がん up to date」と題し、「肺癌診療ガイドライン 2024 年版」を踏まえて最新の肺がんの知識、薬剤選択についてご解説いただきました。とくに肺腺がんに対する遺伝子検査、分子標的治療薬による治療、免疫チェックポイント阻害薬による治療の選択、治療フォローは種類が急速に増えており、現時点でどのような選択肢をとることがよいのか勉強する機会になると思います。Chapter 2 では「肺がん治療に伴う全身症状」と題し、肺がんそのものに伴う症状や、肺がんに対する治療の合併症を各診療科の観点から解説していただきました。これまでと異なる切り口のまとめとなっていると思います。最後の Chapter 3 では最近話題になっている希少がんとして SMARCA4 欠損未分化腫瘍と肺カルチノイドについてご解説いただきました。

本特集は呼吸器内科医だけでなく他臓器を専門とする内科医にも肺がん診療の全体像をつかめるように構成されています。肺がん診療は呼吸器科医・腫瘍内科医のみで行われてきた時代もありましたが、現在はすべての診療科の医師がそれぞれの立場からチームで支える時代となってきています。肺がん治療の進歩は著しく、発症する合併症も当初は不可解なものと感じられることもありましたが、しかし最近では検査を体系的に行うことで合併症のスクリーニングを行うこともできるようになり、決して超常現象のように合併症を恐れなくてもよいようになってきました。本特集をお読みいただき、肺がん診療に対して「どんと来い」という気持ちになっていただければ幸いです。

立石知也

(東京科学大学 呼吸・睡眠制御学講座)